

病院建築の変遷に関する研究

—新聞にみる医療に対する人々の要請について（３）—

横 山 勉 ・ 中 岡 義 介

A Study on Developing Process of Hospital Architecture

—From view point of the people's request
of medical treatment in newspapers (3) —

Tsutomu YOKOYAMA, Yoshisuke NAKAOKA

Showa age before the world war II, a social problem exerted influence on medical treatment, on the other side hospital filled up an establishment. For seeing a doctor is expensive, hesitated to make use of hospital. Hospital attached importance to an object of cure, didn't accept an object of prevention positively. In a sense, hospital didn't fulfil its function perfectly.

はじめに

医療技術や医療器械の発展の内容にめざましいものがあることはここで改めて説明するまでもないが、近年とくにそれがさらに加速されてきていると考えられる。

医療技術や医療器械の発展はもとより歓迎すべきことであるが、病院建築を新たに計画する場合には、新しい医療技術や医療機器に備えるべく増改築を予定して行なわれることが多いというように、技術や機器が病院建築の在り方を強く規定するようになり、それによって病院建築の在り方がかなり分かりにくくなっている。

病院建築は基本的に医療に関する人々とその行動をいれるものであり、したがって医療技術や医療機器は人々の医療に対する要請の上に位置づけられるべきものである。ところが、現状は必ずしもそのようになっていない。

その意味で、人々の医療に対する要請がいかなるものかということがしっかりととらえられ、人々の医療に対する要請がどのように変化してきたか、それを明らかにすることは必要なことである。

人々の医療に関する要請を明らかにする方法にはいくつかのものが考えられるが、そのひとつとして新聞における記事を取上げることが考えられる。新聞は、性格上、その時代時代の医療に対する要請のうちやや話題性の高い記事が取上げられる傾向が強く見られるが、医療に対

する要請を通時的に見ようとする場合には有効な方法のひとつと考えられる。

本稿では、新聞を取上げ、昭和戦前期（昭和元年～20年）における医療に対する人々の要請を明らかにする。使用した資料は、「新聞集成昭和史の証言」全19巻（入江徳郎他編纂，本邦書籍，昭和58年～62年）である。同書には全国の新聞の記事が収録されている。

医療に関する記事は、「社会一般（世相，話題，天地現象，事故犯罪，司法警察裁判，紛糾，医事衛生）」として編集されており，その中から医事衛生に関する記事を抽出した。それを，「明治ニュース事典」全8巻（内川芳美・松島栄一監修，毎日コミュニケーションズ，昭和58～61年）の見出し語を用いて分類，整理した。

その結果取出された項目は，人口，伝染病・病気，出産，医師，健康，体格，衛生，研究，薬，病院・診療所，死亡率，精神病，療法，医師会，医療機器である。

1. 医療に関する記事のあらわれ方

1-1 項目から見たあらわれ方

抽出された記事の総数は234である。これを項目ごとの記事の多少によって見ていくと，大きく4つに分けられる。すなわち，

第一グループ：人口44，伝染病・病気43

第二グループ：出産29，医師20

第三グループ：健康14，体格14，衛生13

第四グループ：研究9，薬8，病院・診療所8，死亡率6，療法4，医師会4，医療器械3，栄養3，看護婦2

である。

人口の増減のこと，そして病気とくに伝染病のこと，ついで出産，医師のことが大きく取上げられていることが，きわめて大きな特徴としてあげられる。医師は別として，伝染病・病気，出産はいずれも人口にかかわる項目であり，昭和戦前期の医療が人口にかかわるものに強く向けられていたことが指摘される。

やや記事の数は少なくなるが，健康や体格，衛生が第三グループに入っていることは，医療の中でも治療的側面ではなく，予防的側面に目が向けられていたことを示すと考えられる。

もっとも数の少ない第四グループに研究とか薬，病院・診療所，療法，医療機器，看護婦といった，現在医療の中心と考えられている項目が見られることは，昭和戦前期の医療に対する目が現在とことなっていることを示すものとみることができよう。

1-2 年代別に見たあらわれ方

年代別にみていくと，昭和2年～6年，昭和12年，昭和14年～17年の期間に記事が多く出てくる。他の年代は記事の量は多くはないが平均して出てきている。ということは，医事衛生が，昭和2年～6年，昭和12年，昭和14年～17年にとくに注目されたことがわかる。では，上記の年代で医事衛生のどの側面が取上げられたか，表1をみると，

病院建築の変遷に関する研究

- A—昭和2年：伝染病・病気(10) 昭和3年：伝染病・病気(7)
 昭和4年：伝染病・病気(10) 昭和5年：出産(4) 医師(3)
 昭和6年：伝染病・病気(5) 出産(3) 医師(3)
 B—昭和11年：薬(4) 健康(2)
 C—昭和14年：人口(7) 昭和15年：伝染病・病気(3) 医師(3)
 昭和16年：人口(13) 出産(3) 昭和17年：人口(6) 出産(5)
 昭和18年：出産(4)

と、とくに記事の多い項目を上げることができる。

A時期では、記事の多くを伝染病・病気が、次に出産、医師が取上げられている。伝染病・病気、出産は人口にかかわる項目で、この時期の医療が人口にかかわるものに強く向けられていたことがうかがえる。B時期では、記事の量は少ないが、薬の項目が他より多く、この時期に限って注目された。C時期では、人口、出産、医師が多く取上げられている。この時期の医療は、伝染病・病気による人口の増減より直接的に人口にかかわるものに強く向けられていたことがうかがえる。

表－1 項目別集計結果

昭和 項目																					計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	
人口	1	2	1	1			1	2	2	3			2	7	1	13	6		2		44
伝染病・病気	10	7	10	2	5				1		1	1		1	3		1		1		43
出産	1	1	1	4	3		2					1		2	2	3	5	4			29
医師		2		3	3	1	1			1					3	1	2	1	1	1	20
健康	1			1			2			1	2	1	2				1	2		1	14
体格		1	2		1					1		1	2	2	2		1	1			14
衛生	1	1								2	1		1	1	1		1	1	1	2	13
研究	1	2			1	1						1				2	1				9
薬		2			1						4				1						8
病院・診療所				2	3							1	2								8
死亡率			1		1						1				1			1	1		6
精神病			1		1						1	1			1						5
療法					1	1					1			1							4
医師会					1												3				4
医療器械									1			1				1					3
栄養									1										2		3
看護					2																2
その他	2								1							1		1			5
計	17	20	14	20	17	3	7	6	7	12	8	9	14	15	21	21	11	8	4		234

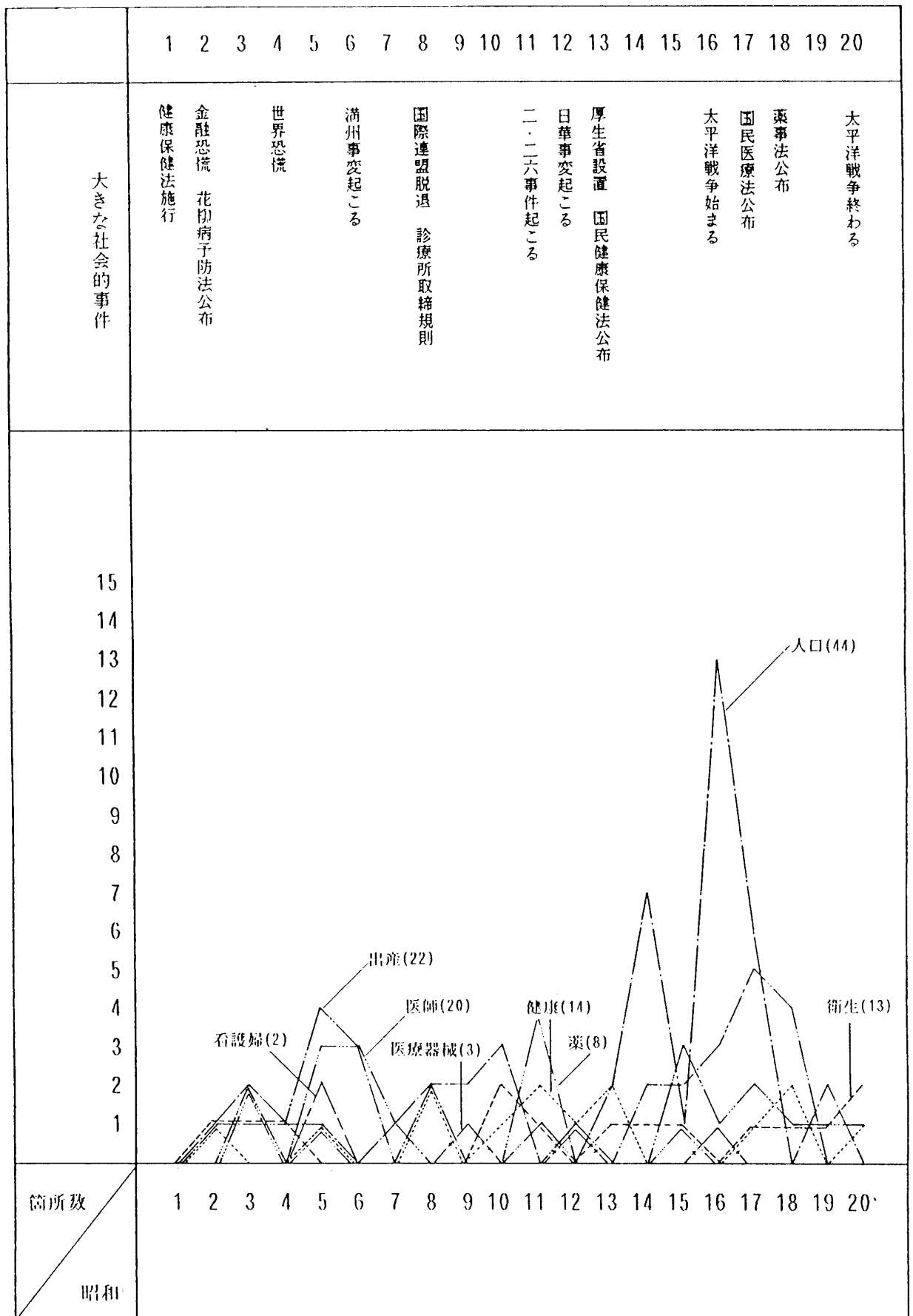


図1 項目分析

2. 調査結果の分析

2.1 分析の方法

記事の数量が多い項目は、医療に対しての人々の要請が強くあらわれていることを示している。故に、表1より数量の多い項目を順序に人口から衛生まで取上げて分析していくことにする。尚、今回は一般病院を対象とするため、伝染病院（避病院）を語る要素としての伝染病・病気、身体検査の統計的内容の色彩の強い体格は除くことにする。また、記事の量は少ないが、病院建築に多大な影響を及ぼしている項目として、薬、看護婦、医療器械は分析の対象とする。以上、分析の対象となる項目は、人口、出産、医師、健康、衛生、薬、看護婦、医療器械の8つである。

2.2.1 医 師

医師に関する記事は計20とたいして多くはないが、図1をみると、昭和戦前中期に一時とぎれているが、ほぼまんべんなくでていることがわかる。ということは、医師のことは昭和戦前期を通じ、とくに話題にこそならなかったがほぼ常時注目されていたことを示しているとみていいのではないか。では医師のどの側面が取上げられたか、図2をみると、医学博士、開業医、無医村、がそれぞれ9、5、4と医学博士が多いが、他はほぼ同数であることがわかる。その取上げ方には時期的な差異がみられる。すなわち、医学博士は前期、中期、後期に、開業医は、前期、後期に、無医村は、後期に集中して取上げられている。ということは、医学博士のことがたえず話題になっていたと考えられる。どのように医学博士のことが取上げられたか、それを記事の内容を見ることによってみていくと、

医療費の軽減が社会問題になった折、その

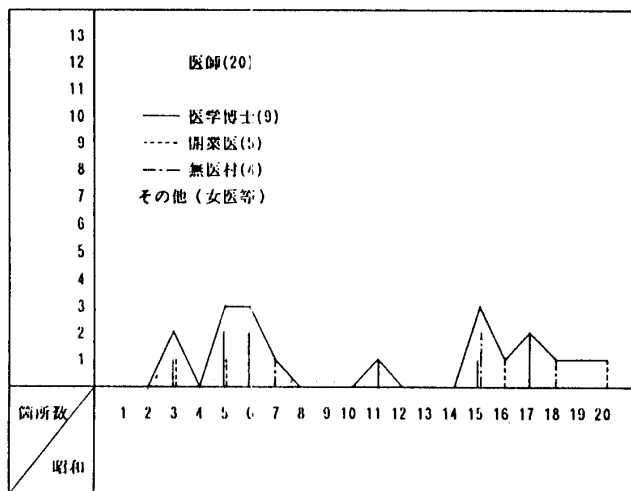


図2 細 項 目 (医師)

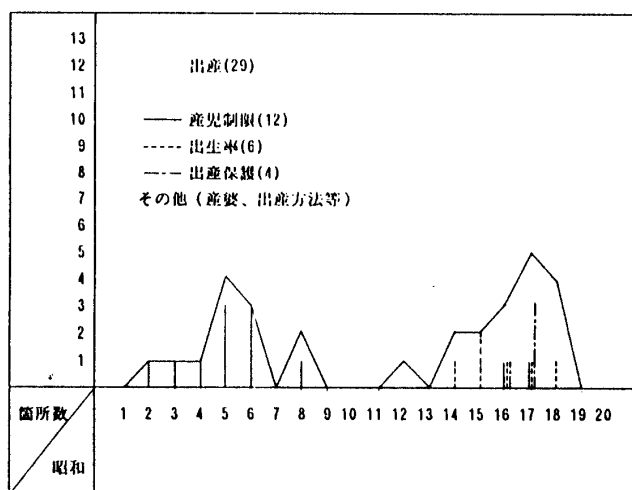


図3 細 項 目 (出産)

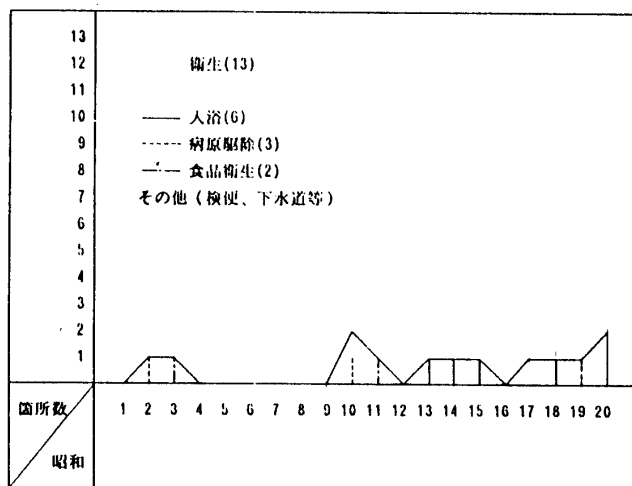


図4 細 項 目 (衛生)

解決のひとつの方法として、取得するのに時間と資金のかかる「医学博士」の称号を広告看板から取除かせることが取上げられた。医学称号の広告を禁止すれば、医学称号を得るための時間、資金が減少し、その結果として医療費、医療俸給の低下が可能となる。（昭和11年6月25日東朝）の記事より

医学博士は博士総数の約7割を占め、まさに大乱売の有様で、医博は国民の保健上重大な関係をもっているだけ益々問題化された。

2.2.2 看護婦

看護婦に関する記事は2と少ないが、図1をみると、昭和戦前前期に集中してでてくることがわかる。ということは、看護婦はとくに大きな話題にはならなかったが、ある時期に限り注目されたとみていいのではないか。どのように看護婦のことが取上げられたか、それを記事の内容をみることによってみていくと、

就業人気の高かった職業であった看護婦の労働条件は、非常に悪く、見習看護婦にいたってはさらにひどかった。病院内では、看護婦は必要ではあったが重要視されていなかったことがうかがえる。（昭和5年12月13日京都日出）の記事より

2.2.3 薬

薬に関する記事は8と多くはないが、図1をみると、昭和戦前の前期、中期に集中して記事が出ていることがわかる。ということは、薬はとくに大きな話題にはならなかったが、ある時期に限り注目されたとみていいのではないか。どのように薬のことが取上げられたか、それを記事の内容によってみていくと、

医療費の軽減として投薬の値下げが叫ばれ、一部の病院で実行されたが、医師会の反発で大多数は値下げに踏切らなかった。医師の収入にとって投薬は大きな位置を占めていたことがわかる。国民の不満は高まりはしたが、医師主導の病院経営が益々進んだことがうかがえる。（昭和5年7月10日都）（昭和11年6月24日東朝夕刊）の記事より

2.2.4 出産

出産に関する記事は29とたいして多くはないが、図1をみると、昭和戦前期の中期に記事がとぎれることがあるが、ほぼまんべんなく出て、前期、後期に集中して出ている年もあることがわかる。ということは、出産のことは昭和戦前期前期、後期に大きな話題となり、ほぼ常時注目されていたことを示しているとみていいのではないか。では出産のどの側面が取上げたか、図3をみると、産児制限、出生率、出産保護がそれぞれ12、6、4と産児制限が多いが、他はほぼ同数であることがわかる。すなわち、産児制限は昭和戦前期、前期に集中的に多く、出生率、出産保護は後期に集中的に取上げられている。ということは、話題は昭和戦前前期に注目された産児制限より出産保護に移っていくのがわかる。すなわち、産児制限、出産保護は相反する思想であることから、ある時期を境に出産に対する考えが変化したことを示すことがわかる。どのように産児制限のことが取上げられたか、それを記事の内容をみることによってみていくと、

中産階級以下の生活苦より産児制限は出発し、次第に人口政策として産児制限は避けられるよ

うになったが、根本的解決はなされなかったと考えられる。（昭和2年8月6日東朝）（昭和16年6月7日朝日）の記事より

2.2.5 医療器械

医療器械に関する記事は計3と少ないが、図1をみると、昭和戦前中期にほぼ集中して出ていることがわかる。ということは、医療器械はとくに大きな話題にはならなかったが、ある時期に限り注目されたとみていいのではないか。どのように医療器械のことが取上げられたか、それを記事の内容をみることによってみていくと、

レントゲンの応用の拡大による健康診断での利用による病気とくに結核発見に好結果を生んだ。しかし、結核患者数の高水準は、健康診断の機関と治療の病院とが別組織であったところにひとつの遠因があると考えられる。（昭和9年1月29日都）の記事より

2.2.6 衛生

衛生に関する記事は計13とたいして多くないが、図1をみると、昭和戦前中期にとぎれているが、ほぼまんべんなく出ていることがわかる。ということは、衛生は昭和戦前期を通じ、とくに話題にはならなかったが、ほぼ常に注目されていたことを示しているとみていいのではないか。では、衛生のどの側面が取上げられたか図4をみると、入浴、病原駆除、食品衛生がそれぞれ6、3、2と入浴が多く、他はほぼ同数であることがわかるが、その取上げられ方には時期的な差異がみられる。すなわち、病原駆除、食品衛生は前期、中期に、入浴は後期に集中的に取上げられている。ということは、入浴は後期にとくに注目されたと考えられる。どのように入浴が取上げられたか、それを記事の内容をみることによってみていくと、

社会的困難な時期にもかかわらず、入浴が衛生上必要であると叫ばれたことより、市民の衛生思想の普及度が高いことがうかがえる。（昭和13年2月3日大阪時事）（昭和20年2月3日京都）の記事より

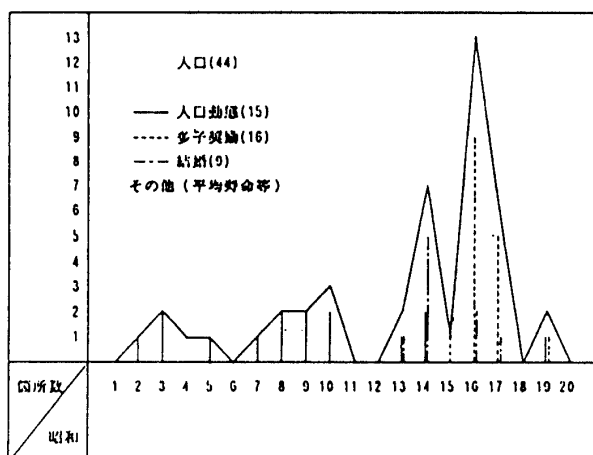


図5 細項目（人口）

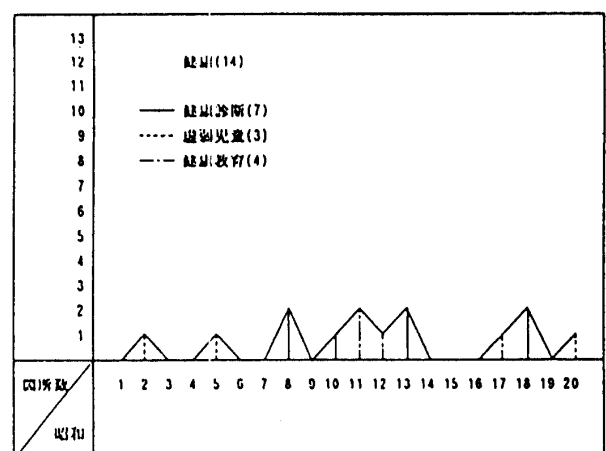


図6 細項目（健康）

2.2.7 人 口

人口に関する記事は計44とかなり多いが、図1をみると、数回集中的に多く取上げられることはあるが、ほぼまんべんなく出ていることがわかる。ということは、人口のことは昭和戦前期を通じ数回大きな話題になり、ほぼ常時注目されていたことを示しているとみていいのではないか。では、人口のどの側面が取上げられたか、図5をみると、人口動態、多子奨励、結婚がそれぞれ15、15、10と結婚が少なく、他は同数であることがわかるが、その取上げられ方には時期的な差異がみられる。すなわち、人口動態は前期、中期に多子奨励、結婚は後期に集中的に取上げられている。ということは、多子奨励と結婚は表裏一体で、人口動態のいち側面を物語っていることが考えられる。それぞれの関係を記事の内容をみることによってみていくと、

当時の諸国と比較して、出生率、死産率、死亡率それぞれが高いことから、医療の中の治療的側面と予防的側面のバランスがよくないことがうかがえる。（昭和8年10月6日中外商事）（昭和13年7月14日読売）の記事より

2.2.8 健 康

健康に関する記事は計14とたいして多くないが、図1をみると、若干の年に記事が出ていないことがあるもののほぼまんべんなく取上げられている。ということは、昭和戦前期を通じ、とくに大きな話題にならなかったが、注目され続けていたことを示しているのではないか。では健康のどの側面が取上げられたか図6をみると、健康診断、虚弱児童、健康教育がそれぞれ7、3、4と健康診断が多く、他はほぼ同数であることがわかる。すなわち、健康診断は中期に集中的に取上げられている。ということは、健康診断は中期にとくに注目されたと考えられる。どのように健康診断が取上げられたか、それを記事の内容をみることによってみていくと、

女給の健康診断とくに局所検診は自殺者を出して社会問題化した。衛生思想が普及したにもかかわらず、健康管理とはいえ局所検診に対して女性の心情的抵抗があったことがうかがえる。（昭和8年3月8日秋田魁）の記事より

3. 相互関連に関する分析

レントゲンは外科の骨透写等にご利用されてきたものが、結核の集団検診に応用されるなど、レントゲンの診療の専門化が考えられるが、医療器械の項と健康の項をみることによってみていくと、

利用範囲が急速に広まったことから、レントゲンの専門分科化が進行していくきざしであると考えられる。

病気になっても経済的理由より医師にかかりにくいなど、市民の医療費に対する不満が高まった時、まず身近な薬の値下げにむけられたと考えられるが、医師の項と薬の項をみることによってみていくと、

医学博士の看板を得ることで、さらに病院経営を確固たるものにしようとする行為に、営利主義がみえかくれし、医師にとって、薬は医療的側面以上に重要性を増してきたと考えられる。

戦前前期は産児制限、後期は多子奨励による人口の自然増加を期待したが、あまり有効に働かなかった。それは、出生率が低い時に死亡率が低く、出生率が高い時に死亡率が高いため、とくに乳児死亡率が関係すると考えられるが、人口の項と出産の項をみることによってみていくと、医療費による市民生活の圧迫のため、容易に病院を利用出来ないことが死亡率の低下につながらないと考えられる。

衛生思想の高まり、衛生知識の普及が健康管理、予防的側面の重要性を認識させ、病氣とくに伝染病の予防に寄与したと考えられるが、衛生の項と健康の項をみることによってみていくと、児童の性教育や予防法の公布など社会問題化しているが、治療的側面の強い病院との関係が稀薄であることがうかがえる。

4. 病院建築の変遷に関する考察

レントゲンの応用範囲が急速に広がり、診療各科の共通の中央的な存在となり、レントゲンの専門化が進むことによって、病院内では専門分野としての組織と空間が確立していくことが考えられる。

薬の値下げに反対するなど、医師の収入源として薬は大きな比重を占めていた。そのため薬の供給のための十分な空間が確保されたことが考えられ、また、診察と同様、投薬の待合スペースも必要であったことがうかがえる。

人口動態の統計より小児の死亡率があまり下がらなかったことがわかったが、小児科としての機能と数が十分でなかったと考えられると同時に、医療費の高額のため容易に病院が利用できなかったことがうかがえる。病院との連携による産後の幼児の健康管理が十分でなかったことにも一因があると考えられる。

病院の機能を十分に発揮するためには、病院の一翼を担っている看護婦の待遇改善が成される必要があることから、病院の看護婦に関する空間も整備されていくことが考えられる。病院の様々な部門に目が向けられ、患者、来客の治療目的以外の空間ができてくるきざしがうかがえる。

5. 結 語

本稿で明らかになったことは次の通りである。

主に外科の骨透視に利用されたレントゲンの応用範囲が広がり、病院で診療各科の共通の中央的な存在となり、その空間が確保されるようになること。

病院で投薬の比重が大きく、薬局は治療的側面、経済的側面で大きな位置をしめてきた。そのために投薬を受ける待合空間が確保されてきたことが考えられること。

幼児の高い死亡率より、幼児の健康管理、指導に小児科の役割、数が十分でなかったと考えられると同時に医療政策に問題があったことがうかがえること。

看護婦の待遇改善の進展とともに、ナースステーション、休憩室等看護婦に関係する空間が充

実され、病院の機能が十分に発揮されるようになる傾向にあること。

病院の治療的側面の空間が充実してくると、それ以外の施設に目がむけられ、患者、来客のための休憩室、娯楽室等の設置による快適性が考慮される傾向にあると考えられること。

昭和戦前期は社会問題が医療関係に色濃く影を落とした時期であった。人々に衛生思想が浸透して健康管理におおいに関心をよせた時期であった。病院は人々にとって治療的側面では大きな位置をしめていたが、医療費の高額等の生活圧迫により、有効に利用されたとはいいがたく、また、人々の病気の対処の方法に問題があったものの、予防的側面において十分に機能しなかったと考えられる。病院の治療的側面の機能を第一に考えられたため窮屈な空間構成であったと考えられるが、患者、来客の快適性のための空間が今後充実していくことがうかがえる。

今回、昭和戦前期の新聞を通して医療に対する人々の要請について調べてきたが、今後、明治期、大正期、昭和戦前期を比較したもの、通時的流れを調べることによって、病院建築のあり方がどこにあったかを確かなものにする必要がある。